

# ヘドリー・ブルにおけるホッブズの国際関係論

大平 道広

## [研究ノート] ヘドリー・ブルにおけるホッブズの国際関係論

大平道広

教育開発センター

## The International Theory of Thomas Hobbes : Interpreted by Hedley Bull

Michihiro OHIRA

## Abstract

This essay aims to understand Thomas Hobbes' international theory more clearly by referring to the interpretation of Hobbes by Hedley Bull (1932-1985), who is an influential British political scientist today. It should be noted that Bull derives an international theory based on realpolitik from Hobbes' political thought. As Bull points out, Hobbes regarded the nation states as political entities that have neither common power nor common rule, thus far from reaching peaceful coexistence. From this premise, Bull tries to demonstrate that Hobbesian nation states will have to compete with each other to secure their self-preservation in international politics. Though these interpretations of Hobbes have frequently been criticized, modern nation states still seem to play important roles particularly when we are faced with discord, for example, in political relations between China and U.S.A., or a politically shocking incident in Europe such as Brexit.

Keywords: Hobbes, Bull, The English School, International theory, Realism

## 1 はじめに

本稿では、英国学派を代表する国際政治学者、ヘドリー・ブルが一九七九年に書き上げたホッブズ解釈に関する一次資料を部分的に訳出し、これを自身の研究テーマである「ホッブズの国際関係思想」に今後展開させるための資料として扱うことを主な目的とする（国際関係思想とは、個々の政治学者や法学者の思想を国際関係論の枠組みで捉える学問である）。

英国学派とは、一九五〇年代に英国で活動を開始した一群の国際政治学者のことであり、当時ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで講義を行ったマーティン・ワイトが、その創始者の一人とされている。その後彼らの理論は六〇年代から七〇年代にかけてブルによって体系的に確立された。そして現在もアンドルー・リンクレイター、バリー・ブザン、ヒデミ・スガナミらに継承され、発展を続けている。

英国学派はその特徴として、国際政治を以下の三つの伝統に区分する。第一はホッブズ的ないしは現実主義の伝統である。この伝統は、国際政治をその本質として権力をめぐる国家間の闘争として捉える立場であり、ホッブズやマキャベリに始まり、カーやモーゲンソーなどへ引き継がれていく考え方である。第二はカント的ないしは普遍主義の伝統である。この伝統は、国際政治の本質を人類共同体という枠組みで捉える。すなわち彼らによれば、国際政治は国境を越えた人類共通の道徳や社会的きずなによって成り立つ。第三はグロチウスのいしは合理主義の伝統であり、これは端的に言えば、現実主義と普遍主義の中間に位置する考え方である。彼らによれば、国際政治の主なアクターは主権国家であるが、それらの関係は闘争によって成り立つのではない。むしろ諸国家は通商をはじめ様々な交

流を行うことで、諸々の慣習や制度、国際組織等を作り、またそれらを維持しながら国際社会なるものを形成している。

英国学派は、国際政治の理論を以上の三つの伝統に区分したうえで、合理主義の考え方こそが、近代以降の国際政治の状況を最も的確に説明しており、また最も理に適っているという立場を取る。このような関係から、以下に見るブルのホッブズ解釈は、専ら現実主義の色合いが強いものとなっている。ではそもそもなぜブルは、ホッブズの国際関係論を一九七九年当時、これほどまでに国際平和に馴染まないものとして捉えたのだろうか。その理由をここで特定するのは難しいが、恐らくブルとしては、当時まだ今ほど有名ではなかった自分たちの立場を際立たせるために、一見すると英国学派の主張に似たような側面を持つホッブズをはじめとする現実主義の理論を、むしろ最大の論敵として位置付ける必要があったのではないだろうか。現に国際政治の主なアクターを主権国家とする点では両者は一致している。とりわけ冷戦期の国際関係論において、早くから国家の役割を強調していた英国学派の立場は、外見上は現実主義の理論と殆ど同様のものに見えたという事情もあったのかもしれない。

ちなみに近年ではこうしたホッブズ解釈は多方面から批判されており、ホッブズの思想の中に、英国学派の言う普遍主義や合理主義の要素を見出そうとする研究も徐々に行われ始めている。実際のところ、ホッブズの自然法思想や彼の政治哲学は、グロチウスやカントなどの思想形成に多大な影響を及ぼしているし、また後に見るように、ホッブズ自身は少なくとも『リヴァイアサン』の中で、国家間の関係についてはさほど明快な見解を提示していない。したがってブルのホッブズ解釈を批判する類の近年の研究は、今後様々な形で展開していくと思われる。

なお本稿で扱うブルのホッブズ解釈は、オクスフォード大学のボドリヤン・ウェストン図書館に所蔵されている一九七九年の一次資料、Hobbes and the International Anarchy: Hobbes Tercentenary Lecture, Oxford である。筆者は二〇一八年に同大学を訪れ、本一次資料に目を通してきた。本資料は、文字通りホッブズ死後三〇〇年を記念して行われたオクスフォード大学での特別講義に合わせて作られたものだが、誤字脱字や一部落丁を除いて、一九八一年に英国の研究誌 *Social Research* に収められた彼の論文、Hobbes and the International Anarchy と全く同様のものであった。同大学には、本資料以外にもヴァッテル、プーフェンドル、カントなどに関するブルの一次資料も存在したが、それらは全て未完成の状態であった。

こうした事実に加え、結果としてブルの主著となり、英国学派の金字塔にもなった *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics* の初版が一九七七年に出版されたことも考慮に入れると、当時ブルは自分たちの主張を周知徹底させるために、早急に英国学派と現実主義の違いを明確にする必要があると感じていたのかもしれない。後に明らかになるが、その際、共通権力のないところに秩序やルールは存在しないとする立場を文面上取るホッブズを引き合いに出すことは、とりわけブルにとっては好都合だったのかもしれない。少なくとも彼自身はこの段階において、英国学派の国際関係論が、現実主義には見られない独自の視点を有することを確認していたのであろう。

こうしたことを改めて推測できることから、本資料は単純にホッブズの国際関係論に関する初期の解釈を詳細に整理するという点のみならず、英国学派のいわば発展史をおさえるうえでもまた重要な資料の一つとして捉えられるかもしれない。

以下の引用文中には一部 [] に囲まれた文章や単語が存在するが、これは原文を補うために筆者が加筆したことを意味するものである。また点線 (・・・・・・) は、一部原文を筆者が省略したことを意味するものである。

## 2 ブルにおけるホッブズの国際関係論 — 前提

ホッブズの国際関係論について考察を行うにあたり、ブルはホッブズの主な問題関心は国際政治ではなかったことを認める。ブル曰く、ホッブズの主な関心事は国内政治、すなわちいかにして国内の個々の人間が争いを避けるべきか、そしてそのためにいかにして彼らが強大な権力を持った国家を設立すべきか、という点にあった。

だがそれでもブルは、これらをもってホッブズが国際政治に無関心であったとはいえないとしている。なぜならホッブズは、スペインの無敵艦隊が襲来した年にイングランドに生まれ、宗教戦争の時代、および海洋の覇権や重商主義をめぐる各国が争っていた時代をそれぞれ生き抜いたからである。またホッブズは、早い時期にツキディデスの『戦史』を英訳したり、セルデンの『海洋閉鎖論』を熟読するなどして、学問的見地からも国際政治に興味を示していた。故にブルは、ホッブズの思想を国際関係に応用することは可能であるし、またホッブズ自身もその可能性を否定していないとしている<sup>1)</sup>。

そのうえでブルは、ホッブズを国際政治における現実主義の伝統を形成する代表者として詳細に解釈を行っている。その後ブルは、ホッブズの国際関係論に対する普遍主義や合理主義の伝統からの批判、およびホッブズの国際関係論が現代に投げかける課題について論述を展開しているが、本稿ではこれらのうち、とりわけホッブズの国際関係論についてのブルの解釈の部分に重点を置いて論述を行うことにする。

## 3 ブルにおけるホッブズの国際関係論 — 現実主義の国際政治学者として

ブルによれば、ホッブズの言う諸国家は、国際政治の領域では共通権力を持たない自然状態、すなわち戦争状態に置かれている。これはホッブズが『リヴァイアサン』の中で、人間間の自然状態について述べたとき、そのような状態が存在する証拠として、国家間の関係を例に挙げたことによる。またこれにより、ホッブズは人間間の自然状態を、国家間の自然状態と同様のものとして捉えていたとしている。ブルは次のように述べている。

『リヴァイアサン』において、ホッブズはアメリカの未開人が自然状態にあると述べる。・・・・・・そして彼はこの有名な主張を〔次のように〕国際関係の現実を求める。「個々の人間同士が戦争状態に置かれたことはかつて一度もなかったかもしれないが、あらゆる時代において国王や主権を持った人格は、独立していることが原因で、互いに妬み合い、にらみ合い、武器を向け合い、剣闘士のごとく身構えてきた。すなわち互いに王国の国境には砦や要塞を築き、銃を向け合い、近隣諸国には継続的にスパイを送り込んできた。これこそまさに戦争状態に他ならない。」こうした一節・・・・・・から、我々はホッブズが自然状態における個々の人間の生活について述べたことは、自然状態における国家間の関係の記述として読むこともまたできるといって差し支えないであろう。<sup>2)</sup>

こうした前提に基づいて、ブルは『リヴァイアサン』においてホッブズが提示した、人間間の自然状態における戦争の原因や動機を、同様の状態における諸国家にも当てはめている。ホッブズは人間を戦争に駆り立てる動機として、ものの所有をめぐる争い（「ものの獲得 (gain)」）、相互不信や不和（「恐怖」 (fear)）、そして「榮譽 (glory)」（これは相手が自分を軽んじるのを防ぐための戦争へと、人々を駆り立てる動機である）を挙げているが、ブルはこれらの動機が、自然状態における諸国家の戦争の原因にもまたつながるとしている<sup>3)</sup>。

ブルはこれら三つの中でも、とりわけ「恐怖」の動機が諸国家を最も激しい戦争に駆り立てると指摘している。というのもホッブズは「恐怖」の動機について論じるに際して、それを全く深慮分別のない人間の感情としてではなく、むしろ将来の不確実性に対して人間が長期的に持つ合理的な不安として捉えているからである。ホッブズによれば、自然状態における人間は、この「恐怖」の動機により、今持っていないものを手に入れたいという欲求よりもむしろ、既に獲得したものを将来にわたって確保し続けたいという欲求を持つ。そして人間は、他人に対してより優れた力でもって自分自身の安全を追求する。ブルはこうした論述が、ホッブズの言う国家間の自然状態にも全く同様に当てはまると考える<sup>4)</sup>。

ブル曰く、こうした「恐怖」の動機に基づく諸国家の対立や競争というホッブズの考え方は、一見すると現代国際政治の軍拡競争や、いわゆる「アクションーリアクション現象 (the action-reaction phenomenon)」に似ているが、実際にはそれ以上に厄介である。というのも今日の国際政治において、軍拡競争などの問題点や危険性を指摘する人々は、通常はこれらに伴う諸々の危険は避けられる、あるいは軍拡自体が当事国双方の誤解や思い込みで過ぎない、と考える傾向がある。これに対して、ホッブズの説明では

諸々の危険は避けることができない。直下に見るホッブズの自然状態の特徴にも関連するが、ホッブズにとっては、より優れた力でもって安全を獲得しようとする各々の国家の利害の不一致は、双方の誤った認識によるものではなく、各々の国家にとって極めて真正なものだからである<sup>5)</sup>。

続けてブルによれば、ホッブズの説明する人間間の自然状態においては、そもそも「正 (right)」、「邪 (wrong)」の概念や、「正 (justice)」、「不正 (injustice)」の概念が存在しない。自然状態では所有権も支配権もなければ、私の物とあなたの物との区別もなく、全ての人に存在する唯一のものは、その人が物を持ち続けられる限りにおいてそれを保有するということだけである。こうした視点において、ホッブズは自然状態の中で、たとえ道徳による諸原則である「自然法 (the laws of nature)」(可能な限り平和を求めよ、という内容を根本原理とする理性の諸命令) が部分的に作用するとしても、少なくともいかなる実定法も存在しないという立場を明確にしている。ブルはこのようなホッブズの見解もまた、ホッブズの国家間の自然状態に応用して次のように述べる。

ホッブズにとって法は主権者の命令であり、人々にとって共通の政府、国家を設立することによって生ずるに過ぎない。したがって、いかなる共通の権力にも服従していない諸々の君主や諸国家は、いわゆる「諸国民の法 (the law of nations)」とよばれる〔国際〕法には服従し得ない。……ホッブズは、諸国民の法は〔平和の見込みのない限り自分自身を守ることを命ずる〕自然法と同じである、すなわち諸国家にとっての生き残りのための深慮のある諸原則であると述べている。<sup>6)</sup>

つまりブルによれば、ホッブズの言う諸国家は、自然状態では道義上平和を求めることを彼らに命ずる自然法の根本原理の前半部にしたがうよりもむしろ、自然権を抛り所にして自己保存を図ることを命ずる自然法の根本原理の後半部にしたがって自己保存を図らなければならない。ホッブズ自身、人間間の自然状態について論じるに際して、自然権は個々の人間が死や傷害から自らを守るためにしなければならないあらゆる自由のことで、この自由は自然状態においては無制限のものであると述べているが、ブルはこの点を強調してさらに以下のように続けている。

ホッブズ曰く、自由や自己保存に関するこれらの自然権は、自然状態における個々の人間と全く同様に、諸国家によっても行使される。〔ホッブズは『リヴァイアサン』の中で次のように言う。〕「全ての主権者は自分たちの安全を獲得するために、個々の人間が自分たちの肉体の安全を守るために持つと同じ権利を持つ。」<sup>7)</sup>

ブルによれば、上記のようなホッブズの思想ないしはホッブズ的な国家間の自然状態に近い状況は、時折ではあるが、ホッブズ以後の現実の国際関係においても見られることがある。ブル曰く、一八世紀から二〇世紀初頭にかけての国際法学の世界では、諸国家の自己保存権すなわち自然権を強調することによって、当時諸国家が構成員となって作り出しつつあった国際社会、およびそうした社会からの平和や協調などの要求を打ち壊そうとする風潮が見受けられた。また二〇世紀では、例えばキューバ危機の際にアメリカが下した一連の決定について、アチソン元国務長官は国際法との関連性を無視していた。さらに石油危機の際にアメリカのキッシンジャー元大統領補佐官が述べたこ

とは、中東諸国の石油禁輸政策によって欧米諸国の経済が封鎖される可能性があるならば、アメリカはそれを防ぐために、必要なあらゆる行為を行う権利を持つという主張を含んでいた。ブルによれば、これらはまさにホッブズ的な思想が、現実の国際政治において見られる典型的な例である<sup>8)</sup>。

以上のように、基本的にブルは、ホッブズの述べる人間間の自然状態の特徴を、そのまま彼の国家間の関係の記述として解釈している。だがさらにブルによれば、自然状態における人間と国家の記述に関する類似性にはある種の限界がある。というのも、ホッブズは、人間の場合は先に述べたような忌まわしい自然状態から脱することができると考えており、この点こそまさに『リヴァイアサン』の真骨頂だからである。すなわち人間は、自然状態において各人がその不都合を理解したとき、国家を設立することによってこの状態を脱することができる。もう少し具体的に言えば、人間は彼らを畏怖させ、彼らの安全を確保できる人物に対して自然権を譲渡するという契約を互いに結び、国家を設立する。そして彼らの安全を任された当の人物は、主権者となって国家を統治する。だがブルが指摘するように、ホッブズは自然状態における諸国家に対しては、いわば同様の逃げ道を全く提示していないのである。したがって諸国家は人間の場合と異なり、永続的な戦争状態の中で自己保存を図らなければならないことになる<sup>9)</sup>。

もっともホッブズは、人間間の自然状態と国家間の自然状態の間にもう一つの重大な違いを挙げている。そしてそのもう一つの違い故に、諸国家は人間が行ったのと同様の契約を再び結ぶ必要がなかったとホッブズは考えていた可能性が高い。ブル自身もこのことに気づいており、次のように述べている。

『リヴァイアサン』の一節で、ホッブズは主権所有の人格がいかに激しい戦争状態にあるかを述べた後、次のように続ける。「彼らはそうすることによって国民の産業を維持するのであるから、諸個人の自由に伴う不都合は生じないのである」。換言すれば、諸国家は剣闘士のごとく互いに身構えているが、それぞれの国家の国民の生活は孤独ではないし、必ずしも貧相で、みじめで、残忍で短いものとは限らない。主権者の権力は、国外に向かっては国家間の無政府状態を作り出し、一方で同様の権力は、国内においては社会的な生活の可能性といったものを提供する。<sup>10)</sup>

このように、ホッブズは上記の一節でもって、国家間の自然状態は、人間間の自然状態ほど恐ろしいものではないと述べていることから、彼が国家間の自然状態をある程度安定した状態として捉えていた可能性を伺うことができる。しかしブルによれば、たとえホッブズの言う国家間の自然状態がそのような類のものであったとしても、それは全く国際平和を意味するものではなく、引き続き対立の可能性を大に残すものである。ブルはホッブズ的な国家間の自然状態について、国際関係においてしばしば試みられる軍縮計画を想定して次のように述べている。

ある超大国同士が、いわゆる一般的な、あるいは「全面的な (total)」軍縮計画に合意できると想像してみよう。この時これらの国々は、軍縮計画の中で通常認められているような、自国内の平和や安全を維持するために必要な最小限の軍勢力を保持するであろう。もしこれらの国々がそのようにするならば、こうした国内の治安維持のための武力や部隊はまた〔新たな〕国際関係の要因の一つとなり、武装化された主権国家シ



システムに伴う典型的な危険を必然的に残すことになるだろう。本来軍縮は、そうしたシステムから我々を救い出すように意図されていたはずなのであるが。しかしこのような危険に直面することと、国内の治安維持の武力を全く持たない社会に生きることのどちらを選択するかという問題にせまられたとき、我々の殆どは後者を選ばないであろう。<sup>11)</sup>

では諸国家は自然状態から逃れられないにせよ、自らをよりましな状況に置くことはできないのだろうか。これについて、ブルはホッブズが人間間の自然状態の中で論じた、「情念 (passions)」と「自然理性 (natural reason)」に突き動かされる人々の様子を諸国家になぞらえることで、その可能性を認めている。ホッブズによれば、全ての人間は、自分たちを平和に向かわせようとする情念に動かされる。すなわち死に対する恐怖、快適な生活に必要なものに対する欲求、そしてそれを獲得できるという希望などの情念である（但しこれらの情念は、一方では人間を激しい闘争に駆り立てる側面も持つが）。また人間は、自然状態においてさえ自然理性を持つ。この自然理性は、人間に対して先にも少しふれた、平和を希求する限り守らなければならない諸原則である自然法を提示する。ブルはこれを国家間の関係に当てはめて次のように述べている。

一度国家が設立されると、自然法は国内の実定法に組み込まれるが、それらは自然状態においても存続しており、そこでは諸国家や君主たちは、互いの関係においてこの自然法によって導かれる。自然状態では、正しい理性によるこれらの諸命令は強制され得ない。また自然法は永遠であり、我々はそれが常に守られなければならないことを望む一方で、実際には我々はそれを守ることが安全な場合においてのみ自然法に拘束される。自然状態ではそのようなことは殆どないのだけれども。〔このように、〕これら自然法は不完全だが、それでもこの「平和の条項 (the articles of peace)」は、ホッブズが述べたように、国家間の自然状態において、もし諸国家が生き残りたいのであれば、彼らが固執しなければならないところの生命線である。<sup>12)</sup>

このように述べたうえで、さらにブルは国家間の自然状態について踏み込んで次のように続ける。

この平和の条項は、我々に対して、第一にとりわけ「平和を求め、それを追求せよ」と命じる一方で、それが不可能な場合は自分自身を守るように備えることを命じる。我々は、相手国が自由に関する相応の犠牲を受け入れるという合意に至ることにより、自らの自由もいくらか犠牲にする用意をしなければならない。……自然状態においては、〔今や〕我々は相手国を扱うにおいて、適当な場面では彼らに謝意や親切心を示さなければならず、また彼らを許容することについてやぶさかであってはならない。そして復讐心、虚栄心、傲慢さを避け、また憎しみや侮蔑を示してはならず、仲介者、使節、外交官の免責を尊重し、進んで紛争を仲裁しなければならない。<sup>13)</sup>

以上の考察から、ブルはホッブズの国際関係論が、本来いかに平和を志向するものであるかを強調している。ブル曰く、ホッブズの国際関係論の中には戦争を称賛したり、武力外交を好んだりする感覚はまったくない。同様に、自然状態においてはいかなる事柄も許されるという主張を

好んだり、的確な判断力や熟慮を放棄したりしてもよいとする感覚もない。だが既に述べたように、諸国家が自然状態に置かれる限り、彼らが平和のために拠り所とすべき自然理性による諸原則は、結局のところホッブズにとっては限定的な効力を持つに過ぎない<sup>14)</sup>。

それらはいかなる実定国際法という形で具体化されることもないし、諸国家の忠誠を要求する外交上や軍事上の慣習などのリスクプールにおいても具現化されることはない。それらは君主たちや諸国家が構成員となるような国際社会や国際共同体が存在することを表現したものでもなければ、彼らに対して諸々の権利を授与し、あらゆる義務を課す国際社会や同様の共同体が存在することを表現したものでもない。国際関係に関するホッブズのアプローチの核心にあるのは……、諸国家はいかなる類の社会や共同体を作ることもなく、戦争状態にあるという主張である。<sup>15)</sup>

かくしてブルによれば、ホッブズの国際関係論は現実主義の伝統を形成するものとして結論付けられる。ブルはホッブズに代表される現実主義の伝統が、必ずしも近代以降の国際政治の状況を的確に説明していないとして、カントに代表される普遍主義、およびグロチウスに代表される合理主義の双方から激しく批判されていることを指摘しているが、それでもホッブズの国際関係論は、直近の（一九七九年の時点の）国際政治において、部分的ではあるが未だに説得力を持つとしている<sup>16)</sup>。

ブル曰く、現代国際政治のシステムには中央集権的な権力が未だに欠けているが、これは見方によってはホッブズの無政府状態を示している。というのも、ここでは主権国家は未だに主なアクターであり、ほぼ全ての軍事力を独占しているからである。またここでは国際法や国際機関は、未だに一時的な、そして不確かな忠誠を諸国家に対して要請するに過ぎない。こうした状況では、諸国家は再び栄誉や安全を求めて互いに激しい闘争に入る可能性を持つ。さらに現代は複数の超大国が核兵器を持つ時代でもある。これまでのところ、彼らはホッブズが提示した死に対する恐怖や自然理性に触発されて、とりわけ既存の実定法や先例が頼りにならない軍備管理の面、および危機回避や危機管理の面、そして勢力の境界線などをめぐる問題で、互いに共通の利益といったものを見出してきた。だが一方で、彼らはやはりホッブズの言う自然権を拠り所にして、自分自身を守り、互いに相手を抑止する用意をしている。核抑止論や核による平和という考え方がそれに相当する。こうした状況に着目するとき、我々は現代の国際関係において、未だにホッブズの世界的な世界観が説得力を持つことを認めざるを得ないのである<sup>17)</sup>。

#### 4 おわりに

以上のことを指摘したうえで、ブルはホッブズの国際関係論についての考察を終えている。冒頭で筆者が述べたように、ブルのホッブズ解釈については現在では多方面から批判がなされている。しかしそれまで二次的にしか考察されてこなかったホッブズの国際関係論について、彼が詳細に解釈を行ったうえで、ホッブズが現実主義の伝統を形成する理由を改めて論理的に説明したことは事実である。また本解釈をきっかけに、ホッブズの国際関係論に関する議論が活性化し始めたことも事実である。したがって本資料に代表されるブルのホッブズ解釈は、その後のホッブズ研究を進展させる役割を果たしたと言えよう。加えて、そも

そも国家が本来いかに振る舞い、またいかなる役割を果たすべきかという問題について考察することは、私企業や個人といった非国家主体の活動がますます著しい現代国際政治においても、引き続き重要なテーマであることは間違いない。ましてや現在ヨーロッパでは、英国の EU 離脱に代表されるように、国家の存在を重視する姿勢が再び強まっている。加えて世界規模でもまた、アメリカと中国という大国間の関係を筆頭に、国家間の不和や対立が顕在化し始めている。こうした状況において、国際関係における国家の在り方について考察することは、今後ますます重要になるであろう。無論ブルのホッブズ解釈はじめ、英国学派や現実主義の国家論は、依然としてそのための有効な視座を提供し得るのであり、したがって我々は一層真摯にそれらに向き合い、検討を重ねていく必要があるだろう<sup>18)</sup>。

## 参考文献

- 1) Bull, Hedley, 'Hobbes and the International Anarchy: Hobbes Tercentenary Lecture, Oxford' in Oxford Bodleian Weston Library, Special Reading Room, WMSS, Rare Books and Manuscripts, Hedley Bull Papers, 1 Classical Theories of International Relations, Box 1, File II: Lecture Series: 'International Thinkers' (Incomplete), Papers and Material on Hobbes, pp.1-2, (1979).
- 2) *Ibid.*, pp.2-3.
- 3) *Ibid.*, p.3.
- 4) *Ibid.*, pp.3-4.
- 5) *Ibid.*, p.4.
- 6) *Ibid.*, p.4
- 7) *Ibid.*, p.5.
- 8) *Ibid.*, pp.5-6.
- 9) *Ibid.*, p.6.
- 10) *Ibid.*, p.7.
- 11) *Ibid.*, pp.7-8.
- 12) *Ibid.*, p.8.
- 13) *Ibid.*, p.8.
- 14) *Ibid.*, p.8.
- 15) *Ibid.*, p.9.
- 16) *Ibid.*, pp.9-14.
- 17) *Ibid.*, p.14.
- 18) Bull, Hedley, 'Hobbes and the International Anarchy' in *Social Research*, 48, pp.717-738, (1981 winter). Bull, Hedley, *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*. New York: Columbia University Press, (2002). Covell, Charles, *Hobbes, Realism and the Tradition of International Law*. London: Palgrave Macmillan, (2004). Covell, Charles, *The Law of Nations in Political Thought: A Critical Survey from Vitoria to Hegel*. London: Palgrave Macmillan, (2009). Hall, Ian, *The International Thought of Martin Wight*. London: Palgrave Macmillan, (2006). Hobbes, Thomas, Richard Tuck ed. *Leviathan*. Cambridge: Cambridge University Press, (1996). Prokhovnik, Raia, Gabriella Slomp eds. *International Political Theory after Hobbes: Analysis, Interpretation and Orientation*. London: Palgrave Macmillan, (2011). Wight, Martin, Gabriele Wight and Brian Porter eds. *International Theory: The Three Traditions*. Leicester: Leicester University Press, (1991). Williams, Howard, *Kant's Critique of Hobbes: Sovereignty and Cosmopolitanism*. Cardiff: University of Wales Press, (2003).

工学教育研究推進機構運営会議

議 長 上平 員丈

構成委員	木村 茂雄	河原崎徳之	栗原 誠	納富 一宏	馬嶋 正隆
	黄 啓新	高村 岳樹	山口 淳一	小池あゆみ	岡崎 美蘭
	高橋 勝美	一色 正男	井上 秀雄	兵頭 和人	山家 敏彦
	塩川 茂樹	工藤 嗣友	脇田 敏裕	野田 毅	吉満 俊拓
	高橋 正雄	三井 和博	星野 潤	井藤 晴久	

神奈川工科大学研究報告

A-46 人文社会科学編 通巻 46 号

令和 4 年 3 月 1 日 発行

編集兼発行者 神 奈 川 工 科 大 学  
〒 243-0292 神奈川県厚木市下荻野1030  
電 話 046-241-6221

印 刷 者 株式会社スクールパートナーズ

当該研究報告に掲載された論文の著作権は本学に帰属する。